

隊

昭和十六年三月 満州国東京城 第七一飛行

場大隊付

昭和十七年四月 水戸陸軍飛行学校将校学生

として入校

昭和十八年十月 仙台陸軍飛行学校付 将校

学生主任教官

昭和二十年五月 学校本部飛行科付（満州国

海浪飛行場）

昭和二十年十一月 ロシア共和国ラーダ収容所

収容

昭和二十二年十一月 京都府舞鶴港上陸

職 歴

昭和二十三年一月 県庁勤務

昭和五十三年四月 県委託事業勤務（事務長）

退職

（宮崎県 清家 祝男）

モンゴル抑留生活八〇〇余日

北海道 長 島 秀 夫

万里の長城線警備に発進

昭和二十（一九四五）年七月二十日のことだ、北支派遣軍司令部より私の所属する独立混成第八旅団に対し、満支国境線に進出するよう指令がきた。

ソ連は、二月の米英ソ三国ヤルタ会議において、ドイツの敗北後三か月以内に、対日参戦を約束していたし、四月には、日ソ中立条約の不延長を通告してきていたのでソ連の満州進攻は、必至と考えられていた。

既に満州駐留の関東軍は、ほとんどが南方戦線に動員され、もぬけの殻であったから、結局満州は放棄し、満支国境の万里の長城で、ソ連を阻止する作戦となつたのである。

私はこの時、中隊長とともに四回目の初年兵教育に当たり、現地召集の新兵（大体四十歳前後の者ばかり）の教育をしていた。

昭和十九年の河南作戦の際、教育中の初年兵を連れて行き、大変な苦勞をし、結局、全員を留守隊に送還するはめになったので、今度はどうか隊内でいろいろ議論したが、旅団全部が、警備地区を離れることになるので、初年兵も一緒に連れて行くことになった。

直ちに戦闘部隊を編成し、二十八日、当時警備を担当していた唐山地区の開鑿炭鉱を出発した。私は、戦闘隊の二番砲手（砲撃の際、方向、距離等の照準を担当する者）と、初年兵の教育係を兼ねることとなった。

部隊は、北京を経て北上し、私達の砲兵隊は八月十日、密雲県の小さな部落に宿営した。

この地方は、名にし負う密雲県。ほとんど毎日雨が降り、夏でも肌寒い日を過ごさねばならない地域である。

幸いその日は、朝から日が差し、夜になっても月の明るい一日であった。連日の強行軍で、疲れた兵を休めるため、急遽演芸会などをやって、気晴らしをさせることになった。

早めに夕食を済ませ、部落の中の広場に集まり、唄、踊り、手品、落語などに、時を忘れて笑いこぼれた。

通信隊や工兵隊には、本職の芸人がいたので、久しぶりに腹の底から笑うことができた。

八時頃だったと思う。通信班にいる同年兵が、私の後ろから、そっと耳に口をよせて、

「今無線で傍受したのだが、ソ連が満州へ侵入してきたようだ。それから長崎に大型爆弾が投下され、ポツダム宣言を受諾するらしい」と言う。

「なに？ そんな馬鹿な」「いや、支那とソ連との話のようで、聞き取りにくいところがあったが、どうも本当のようだ」「うん、誰にも言うな。中隊長にだけ報告しておけ」

宿舎に帰り横になったが、なかなか眠れない。

間もなく演芸会は終わったようで、静かになった。しばらくして降りだした雨は、瞬く間に豪雨に変わり、激しい雨音をたてて降り続いた。

翌朝目を覚ますと、外は一面の水で、昨夜の広場は、雨に激しくたたかれ波立つ海のような。狭い道は、滔々と流れる濁流で『どこが川やら道さえ知れず』であった。

その激しい雨の中を、先を急いで部隊は出発した。

ところが、間もなく初年兵が担当していた予備品車（糧秣や宿営に必要なものを運搬する車）が、道路脇の溝に車輪をとられ転覆してしまった。

中隊長は意を決したように、命令した。

「指揮班、戦闘隊と弾列だけ先行する。病人と初年兵は残す。その他残る隊のことは、准尉が北京の司令部と連絡をとって決めよ。指揮をまかせろ」

中隊長は、昨夜の傍受無線の内容や、ソ連の動

向から一刻も早く長城線に進出する必要があること、益々天候が悪くなり、国境線にある變河の渡河が不可能になるおそれがあることなどを考え決断したようである。

頬に打ち付ける雨の痛さをこらえながら、膝まで没する川のような流れの中、戦闘隊は出発した。

初年兵達は、私の所へきて、一緒に行くという。取り敢えず先に行くのだから、またすぐ一緒になれるからと言って別れた。この時の別れが、終戦後二か月程で日本に帰れたのと、抑留者となり、二年以上の間、酷寒のモンゴルに繋がる身となる分かれ目となるなどとは知る由もなかった。

前面には、岬々として聳え連なる山々。その間を縫うようにして進む道は、岩山を切り開いたもので、進む砲車は、ガタガタと音をたてて激しく揺れた。

普通は一門の大砲を、六頭の馬でひくのである

が、八頭でひかせないと登れないような坂道が多く、一門の大砲を引き上げてから馬をはずし、次の大砲にまわすというようなことを、繰り返しながら進んだ。

雨は、激しくなったり小止みになったりしながら降り続き、兵隊は全員、下着までずぶ濡れであった。夜になっても宿舎など求めようもなく、砲車や弾薬庫の下に天幕を被って、二人三人と身を寄せ合って寝るような始末であった。

このような行軍を数日間してから、道は下り坂になってきた。今度は砲車が自力で走り出さないうちに、馬にひかせながら、つきつきりでブレーキをかける操作をしなければならなかった。

常に山岳地帯で行動するため、大砲をばらばらに分解して搬送する山砲隊と違って、平地線を主とする野砲隊にとっては、この数日間の行動は本当にこたえた。兵隊達の顔には、疲労の色がありありと浮かんでいた。

日が傾き薄暗くなって来た時、「見えたぞ。見

えたぞ」と、前方から大きな声が伝わって来た。

前方の少し下がった所に、白い波をたてながら激しく流れる河が見えた。變河だ。あれを渡れば古北口だ。今日はもう暗いので、明日夜が明けてから渡ればよいと思っていたら、「これからすぐ渡る」と、伝令が伝えてきた。河には勿論橋はない。先行して、鉄舟で架橋してくれていた工兵隊の方から、

「すぐに渡って欲しい。このところの連日の大雨で、水流が激しくなってきたとおり、いつ架橋が流されるかも知れないから、早く渡ってくれ」と言うことであるとのことであった。

暗い中、鉄舟架橋の上を、重い砲車を馬にひかせて渡るのである。ひとつ間違えれば砲車、馬もろとも激流に転落である。しかし谷底のような川辺に並ぶ大砲など、歩兵の小銃にも劣る無力なものである。中隊長は、一、二門の犠牲が出ても仕方がないと腹を決めたようである。

携帯してきた全照明灯に灯を入れ、架橋上を少

しても明るくして、一気に渡ることとした。

工兵隊員が、改めて架橋の索条の張りや、橋板の緊縛状態などの再点検をしてくれた。

第一分隊（私の砲である）の砲から渡り始め、一門、二門と順次渡り、二時間ばかりで、最後の弾薬車が、架橋から河の波打ち際に、どすんと降りたのを見て、誰からともなく「万歳」「万歳」の声があがった。

その直後である。鉄舟の橋は、濁流に流されてしまった。数分遅かったら、最後の弾薬庫は、兵、馬とともに濁流に飲み込まれるところであつた。

直ちに態勢を整えて古北口に入る。八月十六日のことである。既に兵舎には、先行の工兵隊、通信隊、歩兵隊も入っていたので、私達は、先遣隊が確保しておいてくれた近隣の民家を、宿舎とすることになった。

ぐしょ濡れの服を着替え、何日ぶりに手足をのばし、横になってぐっすりと眠ることができ

た。

翌日から、相変わらずの天候の中、行軍中十分に手入れができなかった大砲の手入れや点検、馬の体の手入れなどに過ごしていた。

万里の長城に故郷を想う

昭和二十年八月二十日朝早く、「将校宿舎に集合せよ」という連絡がはいる。どんよりと曇り空の、いやな天気朝であった。何かと思つて、将校宿舎に行くと、既に全員が集合していた。

中隊長が、一段高いところに立ち、沈痛な面持ちで話しはじめた。

「皆、これから話すことを、落ち着いてよく聞け。我が大日本帝国は、この八月十五日、ポツダム宣言を受諾し、無条件降伏をすることになった」

パッと姿勢を直立不動にあらため、

「畏れ多くも天皇陛下には、十五日、玉音放送をもって全国民に伝えられた。以後、我々は、軽

率な行動をとることなく、命令に従い、慎重な行動をとるように、終わり。解散」

と言って、さっと宿舎に入ってしまった。広場は、水を打ったような、全く動きのない、深海の底のような静けさである。

辺りを見回すと、誰も彼も目をぎょろりとさせて、何か言いたいのだが、言葉にならないようである。

宿舎にもどったが、誰も口をきかない。これからどうなるのだろうか。日本に帰れるのだろうか。横になってぼんやりと天井を眺めていた。

「呼集、呼集」の声に、剣を腰につけながら、大砲を置いてある兵舎前に集まる。一、二中隊（二中隊は山砲隊、二中隊は私達の野砲隊）の将兵全員がそろっている。

大隊長は大きな声で、

「作戦命令を伝える。ソ連、蒙古連合軍は、既に満州を南下しており、間もなく長城線に到着するとの報が入った。各地に、すべての砲を山の稜

線にあげ古北口への侵入路に向け、砲列をしくように。自分は、山砲隊第一分隊の砲側にいる。砲撃開始命令は、自分が発する。昼間は赤旗をふる。夜間は照明灯で三回円をかく。いかなる事態が発生しても、自分の命令なくして、砲撃してはならない。各隊は、直ちに行動開始せよ。終わる」

頭の中がもやもやしていた兵隊達は、「それっ」とばかり、指揮班、砲手班の兵がまつわりついて、道もなにもない岩山に大砲を押し上げてゆく。平地でも六頭の馬で引く大砲である。それを道の全くない岩山に引き上げるのだから大変なことである。ちょっと力をゆるめたら、麓までころげ落ちてしまう。

山砲隊は、得意の山岳地帯であり、なれたもので、さっさと砲を分解して、すいすいと山を登って行き、我々がやると岩山の中頃まで登って、フウフウいつている時には、既に頂上で砲を組み立て、のんびりと煙草をふかしていた。

幸い雨も降らないでくれたので、やっとのことで頂上にあげ、あらかじめ見ておいた岩山の窪地に砲を据え、持ってきた砲弾を、すべて砲俵に上げ終わったら、夏の長い日も暮れ、この地方にはめずらしい澄んだ空には、星がまばたいていた。

砲口だけを出して、天幕を張り、光が外にもれないように、照明灯の光を小さくし、砲手班の兵だけが残り、他はすべて兵舎にもどし待機させた。

私は、一番高い岩に座って、暮れ行く万里の長城を眺める。この辺りの万里の長城は、山海関辺りにあるような、城壁の上が歩けるように幅広くできているのではなく、単に石と煉瓦を積み上げた塀が、長々と岩山の稜線上に連なっているだけである。残照に照らされ稜線にのびる長城。眼下はすでに真っ暗で、河の流れが、かすかに淡い光を放っているだけである。あたりは、しーんと静まりかえり、次第に深海に沈んで行くような気持

ちである。

「後続部隊はどうなっているのだ」

「工兵隊の話では、架橋の一部が流されて、重量物は渡れないらしい」

「明日は、ソ連兵も現れるだろう。ここにあるだけの弾を撃ったら終わりだ。砲兵は、持っている弾を撃ち終わったら、ただの人だからな」

「班長、何しているんだ」

「うん。ふふふふ。砲弾がなくなれば終わりだ。ソ連兵は続々と来るだろう。捕虜になどなつてたまるか。この拳銃一発でおさらばするよ。自分の体に撃ち込む弾丸だ。だからよく磨いているんだよ」

「自分達も一発磨きます」

「というので、弾丸を一つずつ渡す。」

「よく磨いておけよ。自分の体に撃ち込むんだからな。俺は、砲の激針や眼鏡を処理し、お前達を見届けてからやるから、一番先に弾丸を弾倉に入れておく。お前達は、順番を決めておけ」

と、弾倉を渡していった。

「あと何時間ぐらいかな」

「これだけの砲弾だ。撃ち出したら瞬く間だよ」

「まあ、明日の昼前には、けりがつくよ。ハッハッ……」

雲一つない澄み切った夜空に、輝く月の光は、どこまでも清く、心の奥底までも、洗い清めてくれるようである。若くして世を去った母の想い出。妻に先立たれ、男手一つで幼い私達一男三女を育て、一日も早い私の帰りを待っていてくれるであろう父のこと。結婚して間もなく、開拓団で、満州に渡った妹のこと。幼い妹達のこと。二十余年の来し方のあれやこれやが、走馬灯のように頭の中を駆け巡る。

ああ、堂々の輸送船

さらば祖国よ 栄あれ

遙かに拝む 宮城の

空に 誓った この決意

三年前の一月二十二日の夕暮れ、私達を乗せた

輸送船は、静かに、広島の宇品港の岸壁を離れた。甲板に立って、暮れかかる東の空を眺めながら唄った歌である。思わず口をついて出てきた。

戦いやんで 長城はるか

月は輝き ほぐさはなびく

露宮のランプも いっしか消えて

大喝一声 吟ずるは

霜満軍営秋気清

数行過雁月三更

越山併得能州景

庶莫家郷憶遠征

ああ この天地 この山上に

明日は屍を さらにとまよ

魂魄長く 偉勲をとどめ

.....

天幕の中に入り横になったが、なかなか寝つかれない。遠く夔河の流れの音が聞こえてくる。

ソ蒙連合軍に武装解除される

八月二十一日、万里の長城線の夜明けは早い。東の空が明るくなり、めずらしく今日も天気が良いようだ。

皆ぐっすり眠ったようだ。晴れ晴れとした顔をして、天幕から出てきた。御者班の兵隊が、朝食を持ってきてくれた。真っ白な飯。熱い味噌汁。ふうふう言いながら食べる。美味しい。米の飯がこんなに美味しいなんて。「腹いっぱい食えよ。沢山持ってきてあるから、昼はどうなるか判らないぞ。それに握り飯を作ってきてあるから置いてゆくよ」

と言って、降りていった。入れ替わりに連絡兵が、登って来た。小さな紙片を渡された。

春作命第0号

1、本朝、古北口我兵団前面に、ソ連軍戦車一〇及び騎兵（兵力不明）出現前進せんとす。我が兵団は断固この敵を撃碎する。

2、各隊は、直ちに対戦車戦闘の準備を完了すべ

し。

3、全員、共産軍の蠢動謀略を警戒すべし。

私は、直ちに砲門を開き、榴弾を装填し、満州側より古北口に入る道路に照準をあわせ、全員配置につかせて砲撃開始の合図を待つ。

交替で、前面の山並みを、双眼鏡で監視するが、動きがない。昼近くになって、「来た。歩兵だ」の声に、双眼鏡を受け取って見ると、道路から大分離れた稜線上の、城壁のくずれたところから次々と歩兵が現れ、古北口の町を包囲するような形で、山を降りてくる。道路上には、まだ戦車らしきものは現れない。

「砲弾開始」の命令は未だ出ない。

しばらくして道路上に、騎兵らしきものが侵入してきた。続いてトラックのような車両が、数台やってくる。未だ命令は出ない。歩兵は、蟻のようにつながり山を下りてくる。大砲の眼鏡を覗いている私の目に、戦車が入ってきた。

「戦車が来た。瞬発信管だけでなく、曳火信管

もつけておけ。連続発射になると思うから、信管を沢山つけておけ」

じっと眼鏡を覗き、次々と現れる戦車に照準を合わせ、命令がくるのを、いまやおそしと、固唾を飲みながら待っていた。しかし、いくら待っても命令は出ず、ソ連兵部隊は、続々と古北口に侵入してくる。命令が出ない。じりじりしてくる。

双眼鏡で、第一分隊の砲側を見る。大隊長は、双眼鏡で敵を見ているが動かない。一番手は、引き金に手をそえたまま「やるか」と言う。

「いや、待て」「隊長は何しているんだ」

じりじりしていると、伝令の兵が登って来た。

「大隊命令。各隊は砲を撤収し、下山して兵舎に集合せよ。下山にあたっては、砲に損傷を与えぬよう、特に注意するよう」

という大隊長命令が伝えられた。何のことか良く判らない。他の隊の様子を見ると、もう撤収作業に入っており、山砲隊では、既に砲の分解を終え下山し始めているところもあるようだ。急いで作

業を終え、兵舎に戻る。

宮門を入れて、びっくり。衛兵所には、ソ連兵がいるのではないか。それに汚らしい、泥だらけの便服のような服を着た兵隊が、うじょうじょしている。モンゴル兵だ。(モンゴルは、八月十日対日宣戦布告し、ソ連との連合国として南下してきたのである)

あたりを見回すと、衛兵所前の広場には、既に砲や小銃、銃剣などが山積みになっている。結局一発も撃たず無抵抗で降伏、武装解除されたのである。

私達も、ソ連兵とモンゴル兵に、尻をつつかれながら、大砲や弾薬などを、武器の山の脇に置かれた。武器を置くと、我々は離れた所へ連れて行かれ、一人一人敵重な身体検査をされた。拳銃などを隠し持っていないか、調べられたのである。

私はあわてた。砲を置いてきたとき、砲が撃てないようにしてやろうと、撃針を抜き取り、予備

のも含めて、ポケットに入れていたのである。幸い小さいものだったので、気付かれずにすんだ。調べ終わると、兵器の山から離れた建物に入るように言われた。

結局、昨日今日と、慌ただしい動きを繰り返しながら、我々砲兵隊と、若干の歩兵が、八月二十一日、ソ連、モンゴル連合軍に武装解除され、捕虜の屈辱を味わうことになってしまったのである。

「これからどうなるのか。日本に帰れるのか」
「通信隊や工兵隊の連中は、どこに行ったんだ」

「通信隊や工兵隊の連中は、通信機や武器など放っておいて、さっさと身一つで河を渡って、北支側へ逃げてしまったらしい」

「そうだよ。こんなことなら、砲など放っておいて、逃げてしまえばよかったんだ。初年兵達を連れてこなくてよかったよ」

裸電球が、一つポツンと点る薄暗い部屋の中、

何を考えているのか、二、三人の同年兵が、私の周りに集ってきた。ギョロギョロした目を大きく開いて、じっと私の顔を見つめている。

「おい、どうする。やるか」

「うん、少し周りを見よう。隊長には、気付かれぬようにしろ、人数は少ないほうがいい」

私は、気心の知れた数人に声をかける。皆、同じようなことを考えていたようだ。

建物を出て、衛兵所の方に行き、様子を窺う。

衛兵所の前には、機関銃が、兵舎の方に向けて据えてある。ソ連兵達は各自、自動小銃を肩にかけ、兵舎の方を睨んでいる。武器の山に近付くと、衛兵所から二、三人が出て来て、銃を向けて、離れるという。兵舎の裏に回ってみたが、高い山に囲まれて、山の裏側は、どうなっているのか全く見当がつかない。

「今夜、ゆっくり話をしよう」

兵舎に帰ると、隊長が呼んでいるという。すぐに隊長の所へ行く。

「長島、参りました」「おお、長島か」

隊長は、横になって何か考えていたようだった。

「長島、お前達の気持ちも、わからんことはない。しかし決行して、絶対成功するとは限らない。失敗すれば元も子もない。成功したとしても、あとに残った者に対する締め付けが、どのようになるか想像もできない。今日まで同じ釜の飯を食ってきた仲間同志だ。皆のためにも、どうか自重してくれ。そして、皆で日本に帰れるように頑張ろうではないか。他の者にもお前からよく話をして、納得させてくれ。頼む」

とやられた。我々の行動をおかしいと思つて、隊長に、誰かが告げたらしい。部屋に戻ると、仲間が寄つて来た。

「何だったんだ」

「うん、隊長は、我々のことを感づいていたよ
うだよ」

「誰か言いつけたんだらう」

「いや、告げ口したかどうかは判らない。我々の動きで隊長が感づいたのかも知れない。いずれにしても、残る皆のためにも、自重してくれということだ。こうなったらもう仕方ないな。あきらめるとしよう」

夜半から雨が降り出した。ソ連側も、我々の取扱いが決まらないようで、毎日ごろごろして過ぐす日が続いた。

八月二十七日、古北口出發。どこへ行くのか、全く判らない。とにかく持てるものだけを身につけて出發する。

敗残兵の行軍が始まった。

前後左右を、けだもののような真つ青な顔をした、モンゴル兵が、

「ホイッシ、ヤポン、ダワイ、ダワイ」

と、わめきながら追い立てる。途中なんとなく、『日本に帰れるらしい』という話が伝わってくる。心なしか、歩き方にも、張りが出て来たようにみえる。

しとすると雨が降って来た。満州の秋の夜は寒い。焚火をするが、拾い集めた雑木は雨にぬれて燃えない。典範令や、果ては下着類まで余分な物は何でも燃やし、火を絶やさないようにして暖をとる。身体が暖まると、行軍の疲れで、ついウトウトと眠ってしまう。

道路脇の草むらに野宿すること二夜。二十九日昼過ぎ熱河省承德に着く。ここは、関東軍の大部隊が、駐屯していたので、兵舎も大きく、既に歩兵、航空隊の兵隊達が収容されており、ソ連兵も沢山いた。

私達は、作戦行動で北支を出発、着の身着のまま、捕虜になってしまった。ふんどし一枚、靴下一足の予備も持っていない。兵舎内にある被服庫、糧秣庫などは既に破られ、荒らされ放題になっていたが、どうにか一揃い集めてきて、着替える。ホッとする。着てきたものは洗濯して乾かすことにした。

しかし乾くまでに、盗まれてしまうので、若い

兵隊を監視役につけ、兵舎内でゴロゴロしていた。食事は、各自が勝手に作って食べるのである。

早くからここにいた関東軍の兵隊達は、しこたま食料などを貯め込んでいたので、炊事している様子を見ると、豪勢なものであった。これにひきかえ我々は、一つの飯盒で炊いたものを、皆で少しずつ分けあって、食べるしかなかった。

このような毎日を送っていたある日、自動小銃の引き金を手をかけた格好で、モンゴル兵が、部屋に入って来た。一瞬、皆ギョッとし、沈黙が流れる。モンゴル兵は、つかつかと、出口近くに立っていた若い兵の側に歩み寄るや、やにわに左腕を、わしづかみにして引き寄せる。

若い兵は、びっくりして、声も出せない。モンゴル兵は、若い兵の手首から腕時計を取ると、ポケットに入れ、ニヤリとする。そして私の隣に立っていた同年兵の前にやって来た。この同年兵は、日頃気の強い男で、胸をドンと打って、むし

るモンゴル兵に、向かってゆくような格好をした。これを見たモンゴル兵は、あきらめたのか、後を向いて出て行くような格好をした。

やれやれと思った瞬間、クルッと向きを変え、バアンと一発撃った。弾丸は、同年兵をはずれ、傍らに座っていた別の若い兵隊の胸を貫通して、後ろの壁に跳ね返った。「ウウツ」と言って、若い兵は、胸を押さえて、うつぶしてしまった。

モンゴル兵は、そのまま出て行ってしまった。

医務室が開いていたので、急いで医務室に運ぶ。幸い弾丸は、肋骨の間を抜けて貫通し、臓器には、全く関係なく、銃創を消毒するだけで、傷がふさがれば問題はないとのこと、しばらく医務室に寝かせておくことにした。捕虜の身はつらい。このような無茶なことをされても、何一つ手出しができない。

何をするでもなく、毎日ゴロゴロして過ごす日が続く。本当に日本に帰れるのだろうか。日に日にイライラがこうじてくる。あちこちで、兵隊同

士のいさかいが多くなってきた。

日本に帰れると言われ

乗った列車は西に向かって走る

承徳に着いた時から私達は、自分の隊の将校達とは分離され、関東軍の見習士官が、私達の隊の指揮をとることになった。

九月十二日昼過ぎ、『日本へ送還されるのが決まった。満州を北上し、黒河で黒龍江を渡り、シベリアを経てウラジオストックに出て、そこから船で日本に帰す』とモンゴル軍から正式に連絡があったと、我々の指揮を執ることになった見習士官から伝えられた。

たいした物もない、身の回りの物をまとめて、いつでも出発できるようにして待つこと二日。九月十四日出発の命令が下る。

急いで営庭に出てびっくりした。

我々は、真夏の暑い真っ盛りに、唐山を出発し、作戦行動をしてきたので夏衣の着の身着のまま

までである。ところが、承德にいた兵隊達は、終戦と同時に被服庫、糧秣庫を荒らし、手当たり次第かき集めていたので、遊んでいるのは、人ではなく荷物の山であった。

列車は、承德からは出ないので、平泉まで歩くことになった。自分の体が見えないくらい荷物を背負った兵隊達は、荷物の重さと、追い立てられながらの行軍や、野宿で閉口し、次々と荷物を捨ててゆく。お蔭様で、身軽な我々は、後から拾っていったのは、身に染みてきた朝夕の寒さや、不足する食料の補給を、なんとかすることができた。十七日平泉に着く。

目の前に、オンボロな貨車が、長く長く連なっていて、煙をはいていた。翌十八日、この列車で平泉を出発。

車内は、上下二段になっていて、約五十人が押し込められた。勿論暖房などなく、敷くものも、身に掛けるものなどあるはずがない。北満の九月末はもう寒い。

夜が明けると、列車は、駅もなにもない、野原の真ただ中に停まる。

飯盒炊さんの時間が与えられる。限られた時間で作らねばならない。手分けして薪を拾い集め、火をつけたが、手持ちの糧秣は、関東軍の兵隊が捨てたのを、拾い集めたものだけである。これから何日かかるかわからない。飯盒に一つ炊いて、皆で少しづつ食べ、一日もたせることにし、体を極力動かさないようにした。

しかし列車にゆられるということは、腹が減るものである。

このような日々を過ごし、奉天を過ぎ、ハルピンを過ぎてまもなく、私が教育し、豆タンクと呼んで可愛がっていた元気な、千葉県出身の林一等兵が、遂に栄養失調で死亡する。

列車の停まったところ、北満の何と言う所か、名も分からない所の線路脇に埋葬する。この頃から私も、体調がおかしく、昼間でも物がよく見えなくなってきた。

ソ満国境の町黒河に到着。大きな黒龍江を渡り、ソ連のブラゴエシチェンスクに入る。十月十四日のことである。シベリア鉄道の列車が来るまで、ここで待つことになった。野宿である。

広い畑を掘って、五、六人が入れる凹地を作り、体を寄せ合って、じっと動かないでいる。日が暮れて、気温がぐんぐん下がる。モンゴル兵は、我々の周りをぐるぐる回って、監視している。そのうち皆ぐっすり寝入ってしまった。何時間たったのか、

「ホイッシ、ヤボン。ホイッシ、ヤボン」「ダワイ、ダワイ」

という大きな声で目を醒ますと、大雨で、辺りは水浸し。我々の掘った穴には、水が流れ込んで、座っている腹の辺りまでいっぱいになっており、禪の中までぐっしょり。

疲れて、ぐっすり寝込んでしまい、誰も気がつかなかつたのだ。

近くの屋根のある材木小屋に連れて行かれ、材

木の上に乗って、雨を凌ぐ。しかし、ぐっしょり濡れた服は、寒さを防ぐどころか、凍り付くような冷たさである。

やっと夜が明け、雨も止んだ。乗車場の方へ戻るのが、私は、全く目が見えなくなっていました。若い兵隊の肩につかまりながら、歩くのがやっとである。

「またずいぶん暗いんだな」

「いえ、もうとても明るいですよ」

「え？ だって、あそこに見えるのは電灯だろう」

「いえ、あれですか？ 今日には天気がよく、あれは太陽ですよ」

栄養失調で、太陽の光が、裸電球の光程度にしか、見えなくなっていましたのである。

兵隊達は、列車の物資の積み込みや、種々使役に使われていたようで、モンゴル兵の、日本兵を追い回すような怒声が聞こえる。私は、目が見えないので、戦友の荷物の番をするということ

残っていた。

夕方になって、乗車の命令が下る。いよいよ日本に帰れるのだ。兵隊達の話によると、米など糧秣を大分積み込んだようだ。これからは、食料も支給されそうで、そんなにひもじい思いもしないですみそうである。

しかし林一等兵も、栄養失調で死んだ。はたして自分は、日本につくまで、生きていられるのだろうか。

列車に乗ったが発車せず、結局一晚、貨車の中で、過ごすことになった。

ゴットンと音がして、列車が動き出した。

十月十六日昼少し前である。

「万歳、万歳。日本に帰れるぞ」

どの車両からも、一斉に大きな叫び声があがった。

しかし私は、日本が、もうそこまで来ているのに、果たして日本に着くまで、もつのだろうか。父や妹達に会うことができるのだろうか。不安な

気持ちでいっぱいであった。

ガタン、ゴットンと列車は、のろのろと走っている。明け方、野原の中に停まる。飯盒で飯を炊く。十分ではないが、幸い米を支給してくれるので助かる。

三、四日経つうちに、私の目が、いくらか見えるようになってきた。小さな窓から外を見ると、全く何もない荒野が、はてしなく続いている。

ゴットンといって列車が停まる。汚い家が、何軒か点在する。駅のようなだが、まともな駅舎もない。

列車の窓の下に、四、五人の女の人が、よく見ないと男か女かわからない服装をして、ジャガイモや野菜などの食料品を持って、自分のかぶり物や、衣服を引っ張りながら、分けの分からぬ声を張り上げている。他の車両の方を見ると、同じような光景が見える。

どうも、食料品と衣料品とを、交換しようとのことらしい。みすぼらしいソ連人の様子から生活

は楽ではなく、衣料品等の支給は、全くないようである。勿論我々には交換できるような余分な衣料品などを持っているわけがない。ところが関東軍側の兵隊達は、持て余して、捨てる程の物を持っている。物々交換で、彼らは、いろいろな食料品を手に入れて、腹いっぱい食べている。我々は腹を空かさないう、ひたすらじっとしているだけである。『もう少しの我慢だ。日本に帰れば、たらふく食べられる』

このような列車の旅を数日間過ごしたある日、
「変だな。列車は、どっちに向いて走っているんだ」

「決まっているよ。ウラジオストックさ」

「それにしても、太陽が列車の進む方向にゆくぞ。列車は西に向かっているじゃないか」

「線路は、くねくね曲がっているから、そんなこともあるさ。モンゴル司令部から、はっきり日本に送還する」と言ってきたのだから、間違いないさ」

と、大きな声で話をする兵隊達の声が入る。そう言えば、ブラゴエンチェンスクを出発してから、半月近くも経っている。いかに列車がのろろ走っていても、もうウラジオストックに着いてもいいはずだ。確かに太陽は、行く手に沈んでいく。おかしい。

翌日、暗いうちから窓の外を見つめる。空が明るくなってきた。それも列車の後の方からである。間違いなく列車は西に向かって進んでいる。

『日本に帰す』どころではない。捕虜として輸送されているのだ。どこへ連れて行かれるのだろうか？

列車が止まった。朝の炊事の時間だ。他の車両の兵隊達に耳打ちする。彼らも不審に思っていたようだ。次々と話は伝えられていった。今までのんびりしていた兵隊達の様子が、急に変わってきたのを、モンゴル兵も感づいたようだ。警戒に歩く姿が厳しくなってきた。

十月二十七日、チタに到着。ソ連軍管区を中心

地である。下車させられる。古いガタガタの無蓋のトラックが何十台も連なっている。休む間もなく、これらに追い上げられる。満車になると次々に出発する。

十月も末のシベリア高地の寒さは身に染みる。

粗末な服装の我々には、風を切って走るトラックの上の風当たりは、衣服を通して身体の芯まで凍るようだ。皆、頭を伏せ、身体を寄せ合って、風の当たらないように、小さくなっている。

○ソ連のスターリンは、八月二十三日に日本人捕虜五十万人のソ連移送と強制労働を指令する。

○モンゴルのチョイバルサン首相が、日本人捕虜のモンゴルに移送を、駐モスクワ大使を通じて、ソ連のスターリン首相に要請していた。八月下旬、二万人の捕虜の受入れが始まった。

○モンゴルへの移送責任者は、モンゴル第七騎

兵師団第十九騎馬連隊長ナンザドルツは、「日本人を一人も失わずに連れていくのが私の任務だ。『モンゴルに連れていく』と言ったら、彼らは逃げ出すと思ったので、『日本に帰す。ソ連兵に見つかると殺されるから、我々が護衛しているのだ』ということにして、捕虜達に伝えたのだ」ということが、モンゴルの捕虜に関する史料に残っている。

零下三〇度の中での重労働

トラックは、一晩中休みなしに走り続け、翌朝ソ蒙国境の町ナウシキに到着する。町といっても、見渡す限り家らしきものはない。点々と見えるのはパオだけである。遮断機が下りている。その脇に小さなパオが二つあり、それぞれからソ連兵とモンゴル兵が出てくる。国境警備の兵である。運転台の男が、二言三言話をする、遮断機があげられ、モンゴル領に入る。十月二十八日の

ことである。

寒空の中、トラック輸送されること三日。十月三十日、モンゴルの首都ウランバートルに到着。やっと、点々とはあるが、建物のある街らしきところに入る。何かしらホッとした気持ちになる。ウランバートルを通り過ぎ、禿山の連なる郊外のホジルブラン収容所に収容される。半地下の丸太造りの建物で、中は板張りの二段式やぐらのようになっていいる。もちろん敷物など全くなく、窓のない、穴倉のような建物である。

到着してまもなく支給された食料は、小さじ一杯の砂糖と、コチンコチンに凍った真っ黒な丸いパンを、五人で分けさせられた。

モンゴルには、僅かな期間に、民間人を含めて、一万二千人を越える抑留者が送り込まれたため、収容所関連施設や食料の備蓄等についての準備が、全くできておらず、捕虜である我々が、自分達の手で、すべて作らなければならない状況であった。

そんな訳で、早速パン製造の要員を探していた。私は子供の頃、父がパン焼き釜を造るのを手伝ったことを思い出し、話をしたところ、各隊から集まった二十数人の中に入れられ、早速収容所の中に、パン焼き釜を造る作業を開始することになった。

ところが使用する煉瓦がない。遠く離れた煉瓦工場から取り寄せることとなり、数日かかることとなった。その間、コチンコチンに凍った黒パンを、毎日食べさせられた。

大量の抑留者が入ったが、その受入れ体制、使用計画も全くできていないので、抑留者達は、狭いところに押し込められ、毎日ブラブラ過ごしているだけであった。その間、また一人、私の教育した兵隊が栄養失調で衰弱死した。目が見えなくなったたりした私は、まだ生きている。

十一月後半になって、ウランバートルから四十キロばかり離れた炭坑に、二百人ばかりの抑留者が送りこまれた。その後、次々と各地の建築や伐

採作業場に送られ、私達の部隊は、ウランバートルの近くの羊毛工場に送られることになった。パン製造グループに入っていた私は、ひとり部隊から離され、以後復員するまで、部隊と一緒にいることはなかった。

私達パン作りグループは、収容所の抑留者が、どんどん各地に送られ、収容所内でのパン作りの必要がなくなった。そんな折、急遽、要員を求めてきた山間の石灰工場に送られることになった。

マイナス気温の中、まる一日、おんぼろトラックにゆられ薄暗くなってから、石灰工場に到着した。工場といっても、一つの部落のようになっていて、太い丸太を立て、塀のようにして、広い範圍をとりまき、その中に家やすべての施設がある。蒙古人の作業員やその家族も住んでいるところである。

雪ももう厚く積もっており、あてがわれた宿舎は、板造りのぼろ家で、雨露をしのぐのがやっとというようなもので、屋内には電灯もない。幸

い、石灰焼の工場なので、薪が沢山ある。早速ストーブに火を入れ、冷えきった体を温めることができた。しかし与えられた夕食は、また凍った黒パンである。とにかく疲れ切っていたので、みんなパンも食わずに寝入ってしまった。

夜中に、腹痛がひどく目がさめる。便所に行きたくなくなったが、蒙古には便所などない。男も女も野原の適当な所で用をたし、あとはそのままである。

しかたがないので、建物の裏にまわり、丸太塀との間で用をたす。激しい下痢、水便のようだ。マイナス三〇度をこす寒さの中、いつまでも裸の尻を出してはいられない。遠くで狼の吠える声が聞こえる。急いで建物内に戻る。

翌朝、抑留者全員の健康診断があった。健康診断というと体裁がいいが、蒙古軍の軍医と称する者が、ただ体温を計るだけである。体温が三八度以上ある者は、作業休止となる。それ以外は、何を言ってもだめである。私は、下痢のせいにか三八

度以上あり、ただ一人作業休止となる。他の者は、マイナス二〇度をこす寒さの中、野天での作業に駆り出されていった。

作業は、石灰岩の裏山に、発破をかけ、くずれた岩を金槌で小さく砕き、これを一つ一つ積み重ねて、大きな炭焼き釜のようなものを作り、中に火を入れて石灰岩を焼くのである。朝六時から夕方六時まで、一日中戸外で、体感温度マイナス三〇度になるまで寒風にさらされての作業は、想像に絶するものがある。

作業から帰っても、皆口もきかない。ストーブのまわりに集まり、与えられた夕食の高梁の雑炊を一息にぐっと飲みほすと、床にバターと横になっってしまう。

与えられる食事は、朝は、精白しない高梁と野菜の水のようなおかゆが、飯盒の蓋に八分目。昼は、例の黒パン一切れに砂糖小さじ一杯。夕食は、朝食よりやや濃いめのおかゆに、羊の肉が一切れ入ったものが、朝と同じ量。朝食、夕食は食

べるのではなく、飲むのである。

私は、作業休止で、宿舎に帰るとすぐに便意をもよおし、建物の裏に出る。雪が赤く染まっている。昨夜、血便が出たのだ。また白っぽい鼻汁のような中に、血がまじっている。三十分から一時間おき位に便意をもよおす。しかし何も口にしていないので、出るものは血のまじった鼻汁のようなものが、たらたらと出るだけである。

赤痢か、腸チフスカ、どっちにしても薬もなく、満足な治療もできない。こんな所にいて、生きて帰れるのだろうか。

このような毎日が続いた。私は、パンを少し食べるほか、朝夕は、おかゆの汁だけしか口にしないでいた。熱は下がらないが、なんとか腹の方は幾らか収まって、楽になってきたようだ。

うじのわいた犬の肉で満足感をあじわう

ある夜、作業を終えて帰ってきた仲間が、ストーブの側で何かこそこそ話をしていた。

夕食がすんでしばらくしたら、三、四人が外に出て行く。まもなく、何か大きなものを引きずって帰ってきた。

「大丈夫か。気がつかれなかったか？」

「大丈夫だ」

ストーブの明りで見ると、大きな犬の死骸である。

蒙古では、狼が夜、部落に出てくるのを防ぐために、大きな犬を沢山飼っている。大きいのは子牛ほどもあるものもある。その犬の死んだのが、雪に埋もれ、天然の冷凍庫に入っていたようなものを、作業中に誰かが偶然見つけたのを、夜になって、監視兵に見つからないように、掘り出して持ってきたのである。

皆は大喜びで、早速解体して飯盒に入れ、持っていた岩塩で味付けをしてストーブで煮て、「美味しい、美味しい」と言って食べた。

犬の肉とはいえ、皆は腹いっぱい食べ、満足したようだ。ここ数か月間、満腹感など味わったこ

ともないので無理もない。

私も、喉から手が出るほど食べたかった。しかし、今の自分の体の具合では、肉や油こいものなど食べてはいけなないと、皆が「美味しい、美味しい」と食べるのを、飲み込むつばも出ない有様で壁の方を向いて、背を丸めてじっと横になっていた。

同僚達は、残った犬の死体を床の下に押し込んで、

「当分は食べられるな」

と、笑いながら満腹の腹をかかえ、横になって寝に入った。

『食べたい。どうせ生きて帰れるかどうかわからない。まして今のような体の状態ではなおさらだ。飯盒の中に、少しぐらい残っているだろう。いや、止めよう。こんな所で死んでどうする。』

親父や、妹達はどうしているだろう。

戦死したと聞いたら諦めもつこうが、こんな所では、しかも、こんなことで死んだことが分かつ

たら、泣いても泣ききれない気持ちになるだろう。絶対生きて帰る。

そんなことがあっても、親父や妹達に会うまでは……。そのためには、どんなことでも我慢し、やるのだ』しんしんと夜がふけ、また雪が降り出したようだ。狼の吠える声が、今夜はばかに近くに聞こえる。

翌朝、二、三人の者が、「腹が痛い、少し腹が下っている」と言いながら、蒙古側の管理棟に行った。作業を休みたいからだ。しかし三八度以上熱がないので、「作業」と言われ、皆しぶしぶ作業に出て行った。

一人になった私は、やっぱり犬のことが気になる。のこのこ起き出し、床下から犬を引っ張り出した。『食べようか。いや……。』しばらく犬をみつめていた。

私の目に、犬の内臓の中に、何か白いものが見えたと見えた。何かなと思って指でつついてみる。ストーブの暖気で、コチコチに凍っていた犬

の体は、融けてやわらかくなっていた。うじ虫だ。よく見ると、うじやうじや沢山いる。

この犬は、恐らく夏に死んだのが、そのまま放置され、腐ってうじがわき、それから雪に埋もれ天然の冷凍庫に入っていたのだ。

ストーブの火だけがたよりの建物内で、食べた一心の皆には、判らなかったのだ。朝、腹が痛いと言っていたのも、そのせいかも知れない。良かった。食べないで。食べたなら私など、完全にダウンしていただろう。親父達は今どうしているだろう。会いたい……。

夕方、皆が帰ってきた。元気な者が、早速床下の犬を引っ張り出そうとした。

「止める。犬は腐っているぞ。うじがわいてる」

「なに？」「今朝、俺も食べたくなって出したんだ。肉の中に白いものがあるので、よく見たんだ。そしたら、うじ虫だった。よく見てみる」

あわてて引っ張り出し、ストーブの明りでよく

見て、彼らもびっくり。昨夜、これを美味しい美味しいと言って食べたことを思い出し、腹を押さえたりする者もいた。

「今朝、腹が痛かったのは、そのせいだな」

「でも。なんだか食べても大丈夫そうじゃないか」

「腹痛程度ですんだが、続けて食べたらわからんぞ」

「やっぱり止めたほうがいい」

民間の抑留者の中から、パン製造グループに入っていた年配者の強い意見で、建物の裏に捨てることにした。

一世一代の大芝居で死線をこえる

屋外作業は、体感温度マイナス三〇度になるまでは作業中止にならない。

極寒の中で、一日中作業させられ、与えられる食事は水のような高梁のおかゆと一切れの凍った黒パン。皆はやはり、犬の肉が気になっているら

しい。「あれがあればなあ」などと口にする者もいた。

私は、じっとしていて、ほとんど食事をしなかったのが、かえって幸いしたのか、熱もあまり出ず、血便も止まり、下痢もおさまってきた。前に目が見えなくなってきた時も、今度も、なんとか持ちこたえられてきた。

作業場に来て、初めての休日の朝、全員が管理棟に集められ、診断を受けさせられた。例によって体温の測定である。私の体温は、三七度一分。明日からいよいよ作業に出される。ところが歩くのもふらふらだ。こんな体で、マイナス二〇度を越える寒さの中で、十二時間に及ぶ重労働では、絶対に体はもつまい。どうしよう。

えい、ままよ。とっさに、後ろ向きになると、蒙古の軍医の鼻先に、クルッと尻を出し肛門をつきつけた。私は、もともとイボ痔があった。だめでもともと。軍医は瞬間、びっくりしたようであったが、幸い肛門に、少し血がついていたよう

だ。見た瞬間、軍医は、「入院」と大きな声で言った。やった。私は内心大喜び。しかし外面は、悲しそうな態度で引き下がった。

部屋から出てくると、皆から「うまくやったな」と言われる。宿舎に帰り、すぐ出発の支度をする。支度といっても、特別に大した物もない。薄い毛布一枚と、小さな雑嚢に飯盒一つである。

結局、私一人だけがトラックで運ばれ、ウランバートル近くのアムラルト病院に、夕方収容された。

「体を洗いなさい」と言われ、浴場に連れてゆかれる。風呂場はとて広い。しかし、どこにも浴槽がない。キョトンとしていると、日本の女性が、「飯盒を貸しなさい」と言って入ってきた。渡すと、しばらくして、お湯を一杯にして持ってきて、これで体を綺麗に洗えという。

体を洗うにも、ふくにしろ、手ぬぐいなど持つてはいない。エイままよと、裸になって、越中ふんどしを外しそれを湯につけ、体中をごしごしと

ふく。ふいては飯盒に、手ぬぐい代わりのふんどしを入れて又ふく。

何か月ぶりかで、暖かい湯で体をふくのだ。あななんて気持ちが良いことだろう。この時の気持ちの良かったことを、今でも忘れることができない。

病衣を渡される。着て来た衣服類は、すべてまとめて病院側に渡す。シラミを殺すために消毒をするためである。病室に連れられてゆく。病室とは名ばかりで、小学校の教室のような部屋が並んでいて、床にびっしりマットが敷いてあり、足の踏み場もないくらいに患者が寝ている。窓際の一枚あいたマットを示される。そこが私の寝床だ。収容所のことを考えれば、はるかに天国だ。

翌日診察を受ける。室内を見回すと、数人いる医者は皆日本人である。昨夜お湯をもってきてくれた女性もいる。そういえば今朝、食事を運んでくれた人達も、皆日本人である。おそらく医者は、日本の軍医であろう。

診察の結果、栄養失調だが、しばらく病院で休んでいけば大丈夫とのこと。薬など十分でないようだが、下痢の薬を三日分ほどくれた。軍医は、

「この病院は、警備兵のほかは、殆ど日本人でやっている。食事なども、蒙古人の主任医者を通じて、積極的に指令部に働きかけているので、割合に良い。安心してゆっくり養生しなさい」と言ってくれた。

病院の裏山の中腹に、石を積んで「アムラルト」と蒙古語で、遠くから見えるように書いてある。「休養」という意味である。ここはもともと病院というよりは、蒙古政府高官達の保養所のような所であつたらしい。

病院での生活は、全く何をするでもなく、朝から晩までごろごろしているだけである。十分な薬もなく、適格な医療処置もできず、ただじっとしているだけである。自力での回復力のない者は、次々死んでいく。この病院だけで、毎日数人が死んでゆく。昨夜、祖国の話をした隣の者が、翌

朝、冷たくなって死んでいたこともあつた。捕虜として、モンゴルに入った日本人一万二千人のうち、二年の間に、二千人をこえる者が死んだのである。その殆どが栄養失調、発疹チフスなどによるものであつた。

死体は、身につけている物は、ふんどしまでとられ、丸裸にされて、病院の外にある廟のような建物の中に放置される。遺体は一日で、コチンコチンに凍ってしまう。数日間で十体位になると、馬車に、丸太でも積むように積んで、裏山に捨てにいく。私は、この病院に二度入院し、このような状況を再三目撃している。

私が、あえて「捨てに行く」という言葉を使つたのは、この病院の作業員として、この仕事に従事させられていた人間から聞いたことによるのである。

コチンコチンに凍つた丸裸の遺体は、頭と足を一人一人が持つと、丸太ん棒のように簡単に持ち上げられる。これを十体ほど馬車に積み上げる。

縄で崩れないように車体に縛り付ける。

裏山の遺体置き場に登って行く。遺体を埋める穴を掘ろうにも、地面は、コンクリートのように凍っていて、ちょっとやそつとでは掘れるものではない。仕方なく、表面に積もった少しばかりの雪をかきわけ、そこに裸の遺体を並べて寝かせ、周りから雪をかき集めて遺体の上にかける。あたりを見回せば、今までに、同じようにして置かれた遺体は、狼に食いちらかされて、白骨になって散らばっていた。

前には、なんとか穴を掘ってと思ったが、今では、早く置いて帰りたいという気持ちがいっぱいで、可哀そうだが段々粗末になってきているとのことであった。

病院では、ある程度元気になっても退院させない。退院させれば、重労働に従事させられることは明らかだ。日本人の医師達は、医薬品の不足、医療設備の不十分、要員の不足等で、病人の回復が思わしくないと、蒙古側に説明し、いろいろと

要求していた。

一方、どの収容所の設備も、全くお粗末で、ちゃんとした便所もないので、建物の外に大きな穴を掘り、さん橋のように板を渡し、それにまたがって、並んで用をたすのである。炊事用の水さえなく、我々抑留者が、近くの川へ行き、ボールで凍った川面の氷をくだき、その氷を毛布に包んで持ち帰り溶かして使うという有様であった。

入浴・洗濯などできるどころではなかった。そのため、急速にシラミが蔓延し、発疹チフスが、全収容所に発生した。ある収容所では、捕虜の半数近くが発病した所もあった。そのため入院患者はあとを絶たず、蒙古の四つの大きな病院では、千人を越える患者がおり、さらに増加するような有様であった。入院患者が増加すれば、当然労働力は低下し、全体の作業計画に大きな影響を与えることになる。

そこで蒙古側は、入院患者を強制的に退院させて、作業所に送り込む策に出た。蒙古側の医師

が、病室を回り検診を始めた。検診といっても体温を計るだけである。結局、各病院でも相当数が退院させられ、あちこちの収容所に送られた。私もその中の一人で、民間人三人と、病院の近くの収容所に送られた。昭和二十一年四月の終り頃である。

増食ほしきのノルマごまかしがばれる

収容所の建物は、どこも同じようなもので、半地下になっており、中は、二段式のやぐらのようなものが並んでおり、上段には、狭いはしごで上るのである。

送られた収容所は、割合に大きな収容所で、やぐらの寝床が何列か並んでおり、通路には、小さな裸電球がポツンとついている。私達は、上段の隅にやられた。

翌日から早速作業に出された。いくつかの作業場を受け持っているのです、それぞれのトラックが来るのを待つ間、広場に整列させられている。モ

ンゴル兵が籠のようなものを持って出てきて、我々の前にバラバラとまきちらす。兵隊達は、ワツと飛び散って、地面に落ちた白い物を拾って、口に運ぶ。パンだ。白いパンだ。

モンゴル兵が、自分達の食べちらしたパンの残りをまいたのだ。腹の減っている日本の兵隊は、見栄も外聞もない。隊長達の制止も聞かばこそ、地面にはいつくばって口に運ぶ。なんとも言えないみじめな姿で、モンゴル兵もこれを見て、笑っていた。こんな風景は、毎朝のことであるのとこのだった。

各作業隊ごとに、きめられたトラックに乗車する。トラックは、それぞれの作業場に向かって寒風の中を突っ走る。まともに風を受けたら、たちまち耳や鼻などは、凍傷になってしまう。皆、うしろ向きになって頭をふせ小さくなっている。

送られた所は、煉瓦工場であった。二人一組になって、土を掘り起こし、水で縛って、木枠で型をとり、天日で乾燥させて作るのである。ノルマ

は、一人煉瓦二〇〇枚、二人で四〇〇枚の煉瓦を作らねばならない。

日本の煉瓦の一・五倍位の大きさのものである。木枠に練った土を入れ、型を作って広場で抜き、乾燥するのを待ち、蒙古側検査員のノルマ完了の枚数確認を受け、広場のわきに、少しずつ隙間をあけて積み重ねる。これで一日の作業完了である。

どの作業場でも、それぞれきめられたノルマを達成すると、その者に、ご褒美として増食が出る。一日につきパン半切れ、砂糖小さじ半分である。増食をもらいたさに皆夢中で頑張るのである。私達も頑張った。

練った土を型に入れ、型を作ることはそれほどきつい作業ではない。問題は、二人一組で四〇〇枚の煉瓦に使う土を練ることが、大変な仕事なのである。

脇の小山の土をくずし、トラックで運ばれる水を、何十組もの組で奪い合うのである。小さな自

分達の飯盒に入れ、何十回も、トラックまでの往復である。水が来なければどうにもならない。四〇〇枚の土を練るための水は大変な量である。さらに土を練る労力は、また格別である。私と組んだ民間人は、年齢も五十歳近くであり、こんな重労働などやったことがなく、さらに二人とも退院まもない体である。

なんとかノルマをこなしては来たものの、これを超えることは到底困難である。考えなければいけない。煉瓦をうつのを、午前と午後に分け、午後の分は、検査員が来る直前に終わるようにする。検査終了後、午前中にうって乾いている煉瓦を整理して帰る。

翌日は、二人でできるだけ沢山、水を桶に溜めるように頑張る。それから一人は土を練り、一人は、昨日の午後にうったままの煉瓦に、水を吹きかけ、見た目には、今うったばかりのようになる。それからゆっくりと、昨日かたづけした広場の空いている所にうっていく。夕方の検査直前まで

に、うち終わるようにする。その間に、昨日うったのを、立てたりして乾燥させる。

検査は、いちいち枚数を数えたりはせず、歩幅を調べるので、寝たままのものと、立てたものがあるが、一応、広場一面に並んでいるのでパスする。その後は早速、昨日うった分を整理して積み上げて完了とする。

翌日は、前日うったのを、水でぬらし、あけた所にうっていく。こうすることにより、土練りは半分ですむ。ノルマは、毎日達成で、増食ももらえる。のんびりと気楽な毎日を送っていた。

ところがある日、九時頃にモンゴル兵が回って来た。じっと見ている。『九時過ぎに、もう広場の半分うってあるというのはおかしい』と思ったのか、つかつかと入って来て、ポンと広場の煉瓦をける。ポカッと割れた。今うったものでないことは、一目瞭然。『これらを整理してからうちはじめろ』と言って帰って行った。

「ばれたか、まずいな」「しかたがない。やる

しかない」と二人で、昼食後もろくに休まずうちつづけたが、結局はノルマは達成できなかった。

何か罰が加えられるかと、びくびくしていたが、数日経っても特に何もなかったので安心した。しかしそれ以後、増食にありつけたのは殆どなかった。

一万を越える日本人捕虜を短期間に、急遽受け入れることとなったモンゴル側は、収容施設、食料の準備は勿論であるが、作業遂行体勢などは、全く考えられていなかった。そこで、日本軍隊においては、『上官の命令は絶対である』というところ目をつけたモンゴル側は、民間人をも含め、捕虜の組織を、日本の軍隊組織そのままにし、モンゴル側の指令は、その隊長を通して指令し、その成果については、それぞれの組織の長に、全責任を負わせるようにした。ために隊長達は、自分の隊のノルマ達成に血眼になり、兵隊達を督励して歩き回っていた。成績不良な者は、できるだけ排除したいと思っていた。

先日まで、私達をチャホヤしていた隊長は、成績のあがらなくなった私達を、他に転属させようとしていた。ちょうどその頃、ウランバートルの中心に、国立大学の建築が始まり、各収容所から作業員を供出することとなった。

収容所の隊長は、これ幸いと、私達不成績の者ばかり十人余が供出された。

送られた先は、航空隊が主体となっているウランバートルの近くの収容所であった。収容所では、私達のグループを一つの班とし、その班長に私が任命された。私はモンゴルに入って間もなく、八月二十二日にさかのぼって、陸軍伍長に任命された。いわゆるポツダム伍長である。

それで、下士官である私を班長として、このグループの責任を負わせることにしたのである。

私達の班には、民間人もおり、歩兵、工兵、私は砲兵というように、あちこちの作業場ではじき出された、成績不良者の集まりである。

舞鶴上陸までシラミとのお付合いを続ける大学の建築は、基礎造りの段階で、穴掘りが主体であった。幸い、マイナス二〇度以下という極寒の時期はとうに過ぎ、気温もゆるんで、地面の凍結はなくなっていたので、穴掘りは順調に進んだ。

航空隊の兵隊は皆若く、十代の者が主体で、特攻隊で出撃したが、途中で天候不良や、機関故障で不時着し、送還されたりした者もいた。皆元気で、ハリキッており、作業能率は大いにあがり、優良作業場と、モンゴル側から褒められたりした。

気温がやわらいだといっても、私達は一年中、軍服のうえに外套、そのうえに防寒外套か、モンゴル側から支給された羊の毛皮の外套かを着たままで、作業場にも行った。収容所内で、盗まれてもしたら大変である。

昼食の休息时间、割合と陽射しもよく、暖かい日であったから、私は防寒外套をぬいで、掘り出

した土の上に腰を下ろして、居眠りをしていた。昼食のパンなどは、朝の雑炊と一緒に食べてしまっているの、昼食はなしである。

「班長、背中にシラミがいっぱいいるよ」

といわれ、外套を脱いで、襟をかえてみるといゝるわいるわ、シラミが、外套の国防色の色が見えないくらい、びっしりと敷き詰められているといゝってよいほどである。これでは夜は、シラミの布団に寝ていると言つてよいほどである。寝ている時、首の辺りがむずむずすると、眠ったまま手を延ばして、殆ど失敗なく、プツンとシラミをつぶすことができた。こんな有様なら当然だと思つた。

昼休みもやめて、外套の襟のシラミだけはとつたが、そんなことで取り切れるものではなかつた。それから舞鶴に上陸するまで、シラミとの付き合ひを続けさせられたのである。

成績の良かった作業場も、再び寒い冬が近付くにつれ地面が凍結し、次第に成績が下がつてき

た。凍結した地面は、普通のつるはしなどでは、逆にはねかえされてしまう。鉄のバールで、ゴツンゴツンとたたいて、少しづつ掘る。一日掘つても、バケツに一杯の土を掘るのがやつとである。一人のノルマが一リユーベである。その十分の一にもならない。

そこで、自動車の廃棄タイヤをモンゴル側よりもらひこれを掘る場所に置いて火をつけ、タイヤの燃える熱で地面を暖め、カリカリと掘り出すようなことをした。

各班が燃やすので、ゴムの燃える黒煙が作業場を覆いその息苦しさはたとえようもなかつた。

材木おろしに腹がへり鳥をたべる

その頃山には、雪が降るようになってきた。建築用木材は、夏の間伐採しておき、雪が降り、地面が凍結するようになってから、一本一本滑らすようにして、麓の道路脇の集積場に集める。そこからトラックで、製材所まで運ばれるのであ

る。

この材木集積作業のための要員供出が、求められてきた。隊長は、これ幸いと、私達成績の上がない仲間を放り出した。

送り込まれた山合いの作業場は、雪が積もっており、木造の小さな建物と、布で覆われた、細長く背の低い幕舎が一棟あるだけである。

中は中央に通路が、両側は、地面から少し高く板張りになっていて、通路の途中にストーブが一台あり、天井には、裸電球が一つポツンと、薄明かりを放っていた。

約百二十人ばかりの抑留者は、二つの建物に分散し、私達四十人ばかりは、布張りの方であった。

私は、建物の中央のストーブのそばに、私達の班の場所を決め、民間人の年寄りを、ストーブの真前に寝かせることにした。

翌日、朝六時に起されて、水のような例の雑炊を食べさせられ、一切れのパンが渡され、外に整

列させられる。薄暗く、雪の降る中で、作業の概要が説明された。山の中に切り倒されている木材の、長さ六、七メートルのものを、集積場まで下ろすのが一人のノルマである。末口十五センチ以上のものは、二本と数える。

五人一組となって作業に当たること。集積所は、下の道路脇である。作業は、日没前に終了し、各組とも集積所に集合することというのである。

私は、十人の班員を二組に分け、若い歩兵の兵長を一方の組の組長に指名し、民間人の年長者三人を、私の組に入れた。

五人は、絶対にバラバラにならないこと。さらに二つの組も、できるだけ近くに、連絡のとれるような位置で行動するように指示して、山に入って行った。

切り倒されている材木を探し、前と後に縄をかけ、山の下り口の方へと引っ張って行く。材木は、上り道では引っ張らねばならないが、下りに

なると、凍った山肌を自分で滑って行くので、ブレーキをかけてやらねば、とんでもない方へ暴走してしまふことがある。引っ張ったり、ブレーキをかけたらしながら、一回で、二本を下ろす。また登る。材木を探して、山をかけおりする。

ノルマを達成するためには、山の登り下りを五回繰り返さねばならない。薄暗くなってから幕舎に帰る。

皆げっそりして、ろくに口もきかない。無理もない。材木のある辺りまで登るのに小一時間。これを五回やらねば、ノルマの達成ができないのである。翌日も、その翌日も同じことの繰り返しである。

民間人は、宿舎に帰っても、全く口をきかなくなり、夕食の雑炊を、一口で飲み干すと、そのままタンと横になってしまう。元氣者の兵長も、大分まいってしまったようだ。

材木も、山の下り口に近いものは、既に下ろされてしまい、だんだんと奥へ奥へと入って行かね

ば、材木はないということになり、次第に歩く距離が長くなって、状況は、益々悪くなる一方であつた。私は班の者に、

「絶対に気を落とすな。どんなことがあっても生きて日本に帰るのだ。こんな所で死んでは絶対駄目だ。俺が何とか考えるから」

と言つてはみたが、私だつて確かな方策があるわけでもなかつた。

与えられる食料は、相変わらず水のような雑炊と一切れのパンである。口では強いことを言つていても、私自身、駄目だと思つたことが何回もある。

前夜、故郷のことなど話をしながら、ストーブのすぐ前の私の隣に寝た民間人が、翌朝冷たくなって死んでいたということもあつた。

寒さのため飛べなくなつて、木からバタバタと落ちてきたウグイスを捕まえ、飯盒一杯の塩味スープにして飲んだり、死んだ鳥を煮て食べた。しかし、二度と食べようという気にはなら

なかった。

松の実を炒って食べると、とても美味しい。モングルでは、松の実から、貴重な食用油を採るので大事なものである。私達が食べているのを見つかる大変なことになる。堅い皮をとって食べるのだが、それではあまり、腹のたしにはならないので、しまいには皮ごとパリパリとかんで食べてしまう。

皮は消化しない。他に食物が入って行かないので、皮だけが大腸にたまり、かたまって便として出なくなってしまう。便はしたいのに出てこない。

肛門に手をやると、肛門は開いているのに、コチョコチの松の実の皮の固まったのが、顔をのぞかせている。やむを得ず、そばに落ちていた木の枝の先でつついて掻き出した。

寒いので、長く尻を出してはられない。ズボンをはく。しばらくしてまたやる。

こんなことを何回となく繰り返し、やっと普通

の便が出るまでになった。それまでの苦しさといったら、それこそ死ぬ思いであった。以後松の実を食べても、皮は絶対に食べなかった。

狼にはげまされ日本帰還を誓う

ある日、午前の作業を終え、午後の分の材木を探して山を歩き回っているうち、切り立った岩場の上に出た。しばらくじっと辺りを見回すと、こんな奥の方には皆来ないので、材木が沢山ある。しかし、降り口まで引張ってゆくだけで大変である。こんなに沢山あるのに、何とかならんかなあと考えこんでしまった。

見晴らしのよい岩場の下をトラックが、集積所の方へ登っていく。雪を固めてエイッと投げる。雪の固まりは、岩場の雪の上をころがり落ちて行き、大きな岩にあたって、バァンと粉々になってしまった。

『ウムッ！』瞬間、私は考えた。

もし大きな材木を、ここから落としたりどうな

る？ 材木が横にならず、落ちていけば、自然とそこに道のようなものができる。そこへ、次の材木を落としたら、自然にその道なりに落ちて行くはずだ。

材木は、一度凍った坂道を通すと、次に通す材木は、若干幹にそりがあると、前の材木の通った跡を、上手にカーブしながら滑って行く。これは今までの経験でわかっていた。

「よしやってみろ」大声を出して皆を呼び集め、私の考えを説明し、できるだけ太い材木を、岩場の頂きまで持ってこさせた。

末口を上にして、一気に押し出した。末口五十センチ近くもある材木は、雪煙をあげ、右、左の岩に、ドスン、ドスンと当たりながら、やや右カーブをとりながら落ちていった。

次に、やや細い材木を同じ落とし口から落とした。材木は、雪煙を上げながら、前の材木と殆ど同じような道を通って、右にカーブを切りながら落ちていった。続けて三本落とした。

末口十五センチ以上のものは、二本と見なされるので、今日のノルマは達成したことになる。

「よし皆、降りよう。この岩場を降りてみよう。材木がどこに行ったか、確かめる必要があるから」

下に降りて、びっくり、五本が、わずか四、五十メートル位しか離れない所に落ちているではないか。

場所は正規の集積場所より三百メートルほど下にあるので、私は、日本人の検査員に、下の集積所を認めてもらい、末口の寸法を計って届けた。

私は皆に、

「絶対このことに関しては、いかなる人間にも話してはいけない。我々が、生きて日本に帰るための体力を保つ大事な方法なのだから」

と、きびしく口止めをした。

翌日から私達の班の二組は、他の班とは異なる山に入って行く。岩場の上に出ると、まず末口十五センチ以上の太い材木ばかりを、岩場の落とし

口に集める。五本で、二組のノルマは達成である。

集め終わったら、できるだけ日当たりのよい、風の当たらない岩かげを探し、皆でそこに集って、のんびりと体を休めて過ごす。太陽が傾きはじめた頃、翌日の材木集め組と落とし組とに別れて、作業を始める。

太いから順次落として行く。材木の落ちるさまは、なかなか勇壮である。

落とし終わり、材木を落とし口に十本集めてから岩場を降りる。材木の通る道がちゃんとできている。自然というものはなかなかうまくできているものだ。下に降りて、あちこちに散らばっている材木を、我々の集積所に集める。集積所のそばまで来ているのも何本かある。小枝を折って末口寸法を計り、検査員に届ける。

月末の休日に、一か月の休日に、一か月の成績が発表になる。この作業所の日本側隊長は、憲兵少佐である。

「長島班の一組、二組は、非常に成績優秀である。ノルマ達成による増食のほか、特別に蒙古側から、塩漬けの肉が出されたから一緒に渡す」と、皆の前で話された。

班員は皆、踊り上がって大喜び。増食として、一人飯盒に一杯のうどん粉、カップ一杯の砂糖。一塊りの岩塩。それに班に、塩漬けの肉一塊り。

早速、宿舎に帰り、ストーブで煮、焼きして今までの空腹の情けない気持ちを一挙に晴らした。他の班も、なにがしかの増食を貰っていたので、みんな腹いっぱい食べ、楽しい一日を過ごした。

それからは、山に登るとすぐに、日当たりの良い岩陰に入り、のんびりと煙草を吸ったりして体を休め、昼食のパンをゆっくりと食べた。そして日が傾き始めると、材木をノルマに必要な量だけ岩場の落とし口に集め、前日集めておいた材木を岩場に落とす。それからゆっくり岩場を降り、材木を整理し、寸法を計って届ける。このような毎日の繰り返しであった。

ある日、日当りのよい岩陰で、のんびりと休んでいると、狼の大きな吠える声にびっくりして目をあける。少し離れた別の岩場の大きな岩の上に子牛ほどもある狼が、四肢をふんばって、大きな声で、天に向かって吠えているのを見た。

明るい陽射しをまともに受け、天空に向かって吠える姿は、こわいというよりも、何かわからないが強い感動を覚えた。

「おい皆、あそこに狼が吠えているぞ。すぐく力強いじゃないか。俺達も強く生きて、必ず日本に帰ろう。どんなことをしてもよい。生きて帰るためには、皆で知恵をしぼって、体は、絶対に無理をしないようにしよう。絶対に生きて帰ろうな」

思わず私は、こんなことを一気にしゃべった。

もっと早く、岩場の材木のこと気がついていたらなら、民間人も、死なないですんだであろうにとの思いが込み上げてきて、とても悔しかった。

このように、実際に働く時間は二時間程度で、

あとは体力を使わないようにして、楽な毎日をごしていた。

寒さは、日に日に厳しくなり、夜半には、マイナス五〇度を越すような日が続いた。マイナス六〇度を越えた夜もあったと隊長が言っていた。このような夜は、便所に行くにも一苦勞である。

戸口に来てから、ズボンの紐からすべてをほどき、下着を手で支え、戸口を飛び出し、きめられた場所に行き、尻を出し、一気に、ウーンと一息、サッと尻をつつんで宿舎に走り帰り、それから尻の始末などをする。ぐずぐずしていようものなら凍傷にかかってしまう。

しかし、このような夜は、シラミ退治にはもってこいである。一晩ある程度寒いのを我慢して、衣類を屋外の木にかけておく。

翌朝これを取り込むと、シラミがみんな真っ赤になって、コチコチに凍っている。衣類をバタバタとはたくと、パラパラと落ちてくる。

雑煮で正月を祝い麻雀で日を送る

十二月も末になってきた頃、私は原因のわからない高熱に悩まされ、結局また入院ということになってしまった。前と同じウランバートルに近い病院である。

相変わらず患者はいっぱいである。

私は、十人ばかりの小部屋に入れられた。診察はしたけれど、医者は何も言わない。どうなんだろう？ 武装解除されてから一年余。その間、栄養失調になり、血便に悩まされ、また、わけのわからない高熱に悩まされ自分の体はもつのだろうか。

横になって、じっと薄暗い天井をみつめる。

翌日また一人、裸にされて、外に持って行かれた。私も、あんな姿でほうり出され、いずれば狼の餌食になってしまうのだろうか。

日本の女の人（満州で薬局を開いていて、夫婦で抑留され、モンゴルに送られてきた人である）が、錠剤を持ってきて、朝夕二錠ずつ飲みと言っ

て置いていく。

二、三日して熱が下がったが、一体私の病気は何なんだろうか？

夜が明けて、昭和二十二年の元日の朝だ。降っていた小雪も止んで、明るい太陽の光が、部屋いっぱい差し込んできた。捕虜になって二度目の正月を、モンゴルで迎えるのだ。

日本でも、父や妹達が、この同じ太陽を拜んでいるのだろうか。会いたい。顔が見たい。そうが一番上の妹の富美枝はどうしているだろうか。

私と小学校同期生と結婚し、満州開拓団の一員として、北滿に来ていたのだ。どうしているのだろうか。無事に日本に帰れたのだろうか。

朝の食事に、餅の入った雑煮が出た。

皆びっくりして一瞬、歓声をあげたが、すぐシーンとなって、飯盒の中をじっと見つめていた。思いもよらない元旦の雑煮。

日本で、家族とともに祝った雑煮を思い、いろいろな思いが、頭の中を駆け巡ったのであろう。

どこの病院でも、特別に治療することもなく、作業のできなくなった者を収容し、薬剤も十分に
あるわけでもないのです、表に現れた病状をおさえる
程度のことをして後は、本人の体力による自然
回復を待っているだけである。毎日死んだ者が、
裸にされて運び出されていく。

私は、その後、熱が出るわけでもなく、毎日を
ただ横になって送っているだけであつた。

ある日、病院内をぶらぶら歩いていたら、窓も
ない、戸もない。物置のような小さな部屋に、十
人ばかりが、床板に毛布を敷いて寝ていた。

前を通りすぎようとした時、中から「長島さ
ん」という声が聞こえた。

「エッ？ まさか」と思ひながら立ち止まつて
振り返つてみたが、部屋の中は暗くてよく判ら
ない。

「やっぱり長島さんだ。日比谷です」
と言つて、一人の男が出て来た。

「アッ！ 日比谷！ お前！」「長島さん！」

彼は、やにわに私に抱きついてきた。

日比谷君は、私が初年兵教育をした召集兵だ。
私より年齢は上である。私の内務班に属し、なか
なか優秀な男で、一選抜上等兵になつた御者であ
る。

私が、モンゴルに入つて、部隊と別れてから、
同じ部隊の兵隊と会つたのは初めてである。

彼は、手の甲に、潰瘍のような湿疹ができたの
をモンゴルの軍医に見せ、伝染性のある病気を、
非常に嫌うモンゴルの習性をうまく利用して、入
院ということになつて、前日に来たとのことで
あつた。

彼に、別れた戦友たちのことを聞いた。彼ら
は、捕虜達に着せるための、衣服や靴などを作る
作業に従事させられていた。皆よく働いて、ノル
マの二倍以上も働き、増食にありついて喜んでい
たようだ。

ところが蒙古側は、段々とノルマを吊り上げて
きたので、相当苦しくなつたようだ。それで絶対

にノルマ以上に仕事をしないように、仲間同士で申し合わせをしたりしていたという。

しかし、作業は室内であり、恵まれた作業であったと言える。しばらくして、急に彼は、どこかの作業場に出されて行ってしまった。

入院中は、何も仕事をするわけでもなく、ゴロゴロしているだけである。退屈しのぎに、何かないかと考えた末、暖房用の木材を削って、将棋の駒や、碁石を作って時間をつぶしたりしていた。

私も小刀を持っていたので白樺の木を使って、小指位の大きさの麻雀牌を作った。

一三六枚の牌を、それぞれ絵を入れて作った。点棒、サイコロも作った。白樺の木は、結構堅いので、同じような大きさにそろえるのに苦労した。

麻雀をする兵隊達も結構いたので、それから、食事の時以外は、飯盒の蓋の中に、それぞれの持牌をならべ朝から晩まで、麻雀ばかりやっていた。

復員時、捕虜生活中に作ったスプーン、フォーク、箸などを持って帰ったが、再三の引っ越しなどで、いつの間にか無くしてしまった。本当に残念に思っている。

しかし、このような天国のような日は、長く続くわけがない。

昭和二十二年二月中頃に退院させられ、送り込まれたのが、前に居たことがある国立大学建築作業場である。

作業場では、穴掘りは大体終り、土台作りが始まっていた。煉瓦をセメントで固めながら、土台を造るのであるが、これがひと苦労である。セメントを水で練って、土台積上げ作業をしている所に運ぶのであるが、急いで運ばないと凍ってしまった。運搬は駆け足でやらねばならず、大変な重労働である。

私は、セメントを作る石灰工場、そして煉瓦造り、建築用木材の搬出をやり、いよいよこれらを使って建築する現場で作業することになったの

だ。十七、八歳の、航空隊の若い兵隊達と一緒に、同じように働くのは、体力の弱っている三十七歳近い私にとっては、いささかきついものであった。

この作業の隊長は、航空隊の若い中尉で、隊内でも嫌われ者であった。朝、作業場に着くとすぐに、モンゴル兵と、二人ばかりの日本兵と一緒に、暖房のきいた小さな建物の中に入り、時々出て来て、気を抜いていたりする者を見つけると、怒鳴りつけて、作業に追い立てるのである。若い兵隊達は、私をよく助けてくれ、なんとかグループでノルマを達成しているような状態であった。しばらくすると私は、目がよく見えなくなり、歩行が困難になってきた。小さな段差のあるところでも、足を上げることができず、手でももを持ち上げて昇るようなことになった。

捕虜になつてから、体が異常になつたのは、これまで何回あるだろう。その度に、なんとか助かってきたが、今度こそは駄目なのか。熱はな

い。作業は休めない。

朝トラックに乗るのも、若い兵隊にかつぎ上げてもらう有様である。セメントを運ぶゆるい坂も登れない。このような毎日が続いて、自分自身、何も考える気力もなく、ただ時の流れに、身をまかせているだけであった。

羊の脳みそのステーキを作り

おもちゃを売って満腹になる

ある日、作業から帰ると、隊長から呼ばれた。

隊長の宿舎に行くと、五、六人が呼ばれていた。

「お前達、明日作業に出なくてよい。後からトラックが来るから、それに乗って、チャガンホール収容所に行け。いいな」

と告げられた。又、作業能率の悪い奴の追い出しである。昭和二十二年三月の中旬のことである。

翌日、作業に出ないで、宿舎内でゆっくり横になつてみると、十時過ぎに呼び出しがかかり、外に出ると、ガタガタなトラックが、広場に止まっ

ている。出てきた者は皆、体の調子の良くない者ばかり、踏み台をしたりして、やっとのことでトラックに乗る。皆、小さくなって、一言も口をきかない。魂のぬけた人形が座っているような有様である。

一時間ばかりで、チャガンホール収容所に着いた。今までの収容所と違い、建物は立派である。幾棟もあり、中は二段式のベッドが並び、それぞれカーテンで仕切られている。

一緒に来た仲間は、数人ずつ別々の宿舎に入れられた。作業所ごとに宿舎がわかれているのだ。私は、鉄工所建築隊に入った。

翌朝、作業場への出発前に、私は隊長と呼ばれた。鉄工所現場の炊事を担当しろというのである。

チャガンホールの隊長は、航空隊の少佐で、とても兵隊のことを心配し、食事の材料、量についても、強くモンゴル側に要求し、作業ノルマ、作業環境についても、直接モンゴル総司令部と話を

したりしているようで、捕虜の生活環境は、今までのどこよりも良い。その結果、作業成績もよく、すべて好循環しているのである。

パン一切れの昼食とせず、それぞれの作業場内に昼食だけを作る炊事場を作り、朝出発前に材料を渡し、現場で調理し、温かい昼食を、十分な時間をとって、食べさせることにしているのである。

朝食の時、昼のパンを食べてしまい、昼食ぬきということにはさせないということである。隊長は、下士官であり、体の弱っている私を炊事担当にしたのである。補助員を一人、現場隊長と相談して出して貰い、二人で、五十人ばかりの昼食の炊事をするようになった。

毎朝、収容所の炊事係から、麻袋二袋に入った材料を受領し、兵隊達にかつがせて、作業場に向かう。作業場は近いので徒歩である。五人ばかりのモンゴル兵が、隊列の前後左右についてくる。

ウランバートルの街中に近い所なので、女、子

供など一般の蒙古人も歩いている。ポットンポットンと木造の家もある。作業場では、野天にあるかまどを使って炊事をする。持ってきた麻袋を開けて、びっくり。少しばかりの米と、泥だらけのキャベツが数個。それに、羊の頭が、ゴロゴロと出てきた。口に牧草をくわえ、目を見開いてているのもある。一瞬ギョッとした。一体なんだ。

後で判ったのであるが、抑留者に渡す食料など、蒙古側で、かなり中間搾取していたようである。一纏めにして目方を計り、五十人分の肉だと言って渡されたのである。これで肉などない。せいぜい舌ぐらいのものである。日本でも牛の舌を、タンなどと言って、喜んで食べてはいるが、羊の舌など食べたこともない。

抑留生活では、そんな美味観賞どころではない。とにかく食べられる物が欲しいのだ。そこで、全部釜に入れゆでて、頭の皮をはぎ、舌をとり、頬の肉など、食べられそうところはきれいにとる。完全に頭の骨と、毛のついた皮だけにす

る。結構食べられるところが出てきた。これとキャベツをきざみ、米をまぜた雑炊を作る。岩塩で味をつける。結構いける。

作業班に飯盒の召集をかける。ずらりと並べられた飯盒に、平均に入れていく。少しの量の多寡が、なかなか大変なのである。

配給を終わって、私も食事をしながら、羊の頭の骨を見ていて、ハッと気が付いた。

「そうだ、オイッ、羊の頭を割ってみよう。脳味噌があるはずだ。食べられると思うよ」

早速、作業現場から、なたと金槌を借りてきて、脳天のところを、パツと割る。出てきた。握りこぶしより少し小さな脳味噌。薄皮をはいでみると、堅さは豆腐のようだ。口に入れてみると、ちょっと甘みがある。うまい。食べられる。薄く切って、ちょっと火にあぶり、塩味をつける。作業現場に持っていき、兵隊達に食べさせる。皆、美味しい美味いと喜んでくれた。

激しい仕事に従事させられ、朝夕は、きまった

ような雑炊しか食べさせられない毎日である。昼食が楽しみになるような物を作ってやれば、少しは心の安らぎに役立つかもしれない。

炊事用の水は、馬車にドラム缶をのせ、地下水を汲み上げている街なかのポンプ場に行き汲んでくるのである。行き帰りは、警備のモンゴル兵もつかず、私一人が、馬車の荷台に乗って、のんびりと往復できるのである。時には、街中を回り道したり、割合と自由な行動がとれた。その途中、野原に茂っている雑草の中から、食べられる野草を見つけ、採集してきて、茹でておしたしにする。羊の脳味噌のスープ、舌のステーキ、ロールキャベツなどを作り、なんでも炊き込んだ雑炊でなく、御飯と惣菜、スープなどと、目先を変えた昼食を作ってやった。

現場の皆から、「今日は何が出るのかな」などと、昼食が、楽しみであると言われ、嬉しくなった。収容所内でも、鉄工所の昼食は、「とてもいいそうだ」と評判になったようだ。

私の作業は、昼食を作るのがノルマであるから、きついことはなく、羊の舌や脳味噌を、少し残していき、いろいろと料理して食べ、手のあいた時間は、気の向くままに、適当に現場作業を手伝ったりしているうちに、体の調子もよくなってきた。

モンゴル司令部と作業現場との連絡は、将校が行っていたが、単に連絡事項の受け取りに行くだけであり、将校には、現場の指揮に専念してもらうため、時間的に余裕のある私が、この任に当たることになった。

私は、外地に行ったら、その土地の言葉を、早く覚えることが大切だと、北支に入ったときも、内地の父から支那語の本を数冊送ってもらい、支那人を相手に、少し覚えたことから、二年兵の後半、一時、偵諜班（支那人を使って、支那側の情報を収集する組織）に属したこともあった。

モンゴル人に入ってからは、勿論本などない。モンゴル人を相手に、できるだけの機会を捕らえ、

物を指差して、その名を聞く。そんなことを繰り返して、身振り手振りをまじえながら、なんとか話が通じているのではないかと、思えるようになっていた。

それからは、水汲みだ、連絡だと、外に出る機会が多く、しかも監視もなく、単独で自由に行動できるようになった。木工場の木屑を使って、おもちゃの汽車を作り、外出するとき持って出て、母子連れに、走らせてみせる。くれと言う。売ってやると言う。幾らだと言う。タヴンチアウス（五円）という。ニェット（だめだ）。ネッグチアウス（一元）という。結局、ゴルブンチアウス（三元）で妥結。

作業現場に帰ると、いつも来ている女性の監視兵が来ていた。金を渡し、ヤミのパンを買ってもらう。抑留者の五食分に相当する量で、しかも白パンである。炊事の兵にも分けてやり、腹いっぱい食べる。

これに味をしめた私は、時間を作って、小さな

人形が、鉄棒にぶらさがって、クルクルと回る機械体操のおもちゃとか、木製のいろいろなおもちゃを作っては、外出の際に持ち出し、母子連れを見つけては売って、パンを買って貰った。

また、人間というものは、毎日顔を合わせ、言葉をかかわしているうちに、人情というものが湧いてくるものだろう。モンゴルの司令部の彼らは、抑留者の食糧事情の悪いのは良く知っている。それで時には、塩漬けの肉などをくれたりするようになった。

気候はよくなり、作業は楽で、食事は今までとは、比較にならないほど十分にとれるようになった。それに、殆ど自由に日々を送り、しかも、昔から喜ばれたりして非常に精神的に明るく過ごす事ができるようになった。

日本送還によるこび

ナホトカでの人民裁判におびえる

夏も過ぎ、鉄工所の建築も外壁はでき、内装に

かかり始めた頃、『日本に帰れるらしいぞ』という噂が流れ始めた。連絡で司令部に行ったときなど、それとなく注意していたが、それらしい様子もない。ところが毎日、作業所に来ていて、親切にしてくれていた女性の監視兵が、ここ二、三日来ていない。

何かあったのか気にしていたら、数日後、ニコニコしながらやってきた。そして、頼んでもいないのに、白パンを一ヶ差し出して、ニココリしながら、一言もしゃべらず、さかんにコックリを繰返す。パンを受け取ると、また、ニココリ笑って、私の肩を軽く二、三度たたき、くるっと背を向けて帰って行った。

蒙古の女性、色は黒く、背は低く、着るものもせいもあるが、全く男か女か判らない。ところが彼女は、背もすらっとしており、顔色も赤っぴいけた色でなく、着る物は、他の人と同じ黒っぴいものであるが、それがかえって、色白に見せている。

彼女が、ニココリ笑って帰っていったとき、長い髪を編んで後ろにたらしした後姿は、今でも忘れられない。

彼女は、一言も口には出さなかったが、私達の帰還が決まったことを伝え、別れに来てくれたのだった。

十月に入ると、「どこどここの作業班は、出発準備に入ったそうだ」「どこどこは、出発したらしい」などという噂が飛びかい、蒙古側も、作業の促進を督促してきた。それで「この作業が終わらないと帰れないのか？」などとあせる気持ちも出てきた。

月半ばも過ぎ、「もうだいたい帰っているのに、ここには、そのような話が、ちっとも来ないのは、今年も残されるのではないか」という悲観的な話の流れようになった。もしかた、三度目の冬を越すなどということになったら、抑留者は全滅するかも知れない。

十月二十六日の午後、小林隊長から

「今日、日本に向かって出発だ。帰還だ。現在かかっている作業を速やかに区切りをつける。終わったら、後を整理して集合せよ。宿舎に帰ったらずぐ出発だ」と伝えられた。

「ウォーッ」「それっ」大歓声とともに全員が、作業に散った。警備の兵も、ニコニコしながらわれわれの動きを見ている。しばらくこなかった女兵士がやって来て、「ハロショー」と言いながら手を出してきた。私も「ハロショー」と言っていて、握り返した。私の手にも力が入っていた。「人間の心の心底には、国境や、人種の違いがない」と心の熱くなるのを覚えた。

日がとっぷり暮れた頃になって、やっと一段落ついた。点呼。全員集合を確認して、駆け足で宿舎に帰る。何台ものトラックは、既に、エンジンをかけていて、他の各作業所の隊は、すべて乗車が終わっていて、私達の隊の乗車を待っている状態であった。

大慌てでトラックに飛び乗る。最終の点呼を終えると同時に、ウランバートルチャガンホール収容所を出発。昭和二十二年十月二十六日午後八時。日本帰還の途だったのである。

真夜中の一時過ぎ、ガンドン収容所到着。外套、服、靴などを支給され、少しばかり寝る。

二十七日、陽が昇らぬうちに、全車両二十九両で出発。私は、第一小隊に属し、全体の給与担当を命ぜられる。

自動車は快調に走り、夕刻前にスフバートルに到着。一泊する。翌日起床後、直ちに各車両に食料を配給し、再びトラックで、ソ蒙国境線まで行く。下車し、徒歩で二年前と同じ、例の遮断機しかない国境線を通って、ナウシキまで行く。

思えばちょうど、丸二年前の今日、モンゴルに入ったのである。二年前、ここを通ってモンゴルに入った日本人捕虜は、一万二千人を越えていた。今、ここを通って、帰国の途につけるのは、一万人そこそこである。二千人を越える人が、食

料もない、あの極寒の中での重労働の酷使に耐え兼ね、命を落とす、野ざらしの姿で、放置されているのである。帰ることになった者の中にも、病身の者、凍傷などで、手足を切断した者も沢山いる。

この二年間を振り返り、私は、よくもこの日を迎えることができた、つくづく思った。

栄養失調になり、目が見えなくなったり、血便を出し、歩行困難になったり、原因不明の高熱に悩まされ、二度も入院し、どこか収容所でも、作業能率最悪者として、あっちこっちの作業所におしつけられながら、何度も周囲の者に、「わしに、もしものことがあったら、日本に帰ったとき、こういう所に親がいるから、是非わしのことを伝えてくれ」と頼んだりしていた私が、一緒に帰る他の者に負けないほどの元気な体になっている。

随分いろいろのことがあったが、やっぱり、「絶対に生きて帰る。そのためには何でもする」というぎりぎりの生に対する深い執着が、生きる

ための、いろいろな策を出させてくれたのである。う。

露営で焚火の薪にしようと、こわれかかった無人の家をこわしていたら、ソ連の歩哨におどかさ

れる。
翌日、私達、丈夫な者ばかり十人程が、装具を持ってトラックに乗せられる。どこに連れられて行くのか、何をするのか分からない。小さな駅のような所に着く。

しばらくすると、沢山のトラックが到着する。米、パン、小豆、油、煙草等々が積まれていた。ウラジオストックまでの食料である。これを荷降ろしして、あとはのんびり交替で、集積した食料の監視をしながら夜を過ごす。監視しながら食料をがめた奴もいたようだ。

後続部隊の到着を待って、各車両毎に、食料を分配しナウシキを出発、シベリア鉄道チタ駅に着した。ここで一夜を明かし、三十一日、いよいよシベリア鉄道で、日本に向け走り出したのであ

る。

二年前と同様、列車は、一日一回シベリア平原の真っ只中に停車し、炊事をさせて、又走り出す。ただ違うのは、朝日は、列車の前方から昇ることだ。間違いなく東に進んでいる。兵隊達の顔も明るい。

十一月八日未明、ソ連最後の終結地ナホトカに到着する。駅の近くに野宿する。集結している抑留者は、我々モンゴルからのものだけでなく、シベリアの抑留者達も沢山来ていた。

翌九日、夜中の二時過ぎに食事が渡される。夜が明け点呼を受け、九時過ぎに、二食分だと言って、また小豆を炊いたものをくれる。列車で運んだ食料はどうなっているんだろう。

翌日から、物資の運搬や、車両への積込みなどの使役に狩り出される。しかし使役の時間はわずか、あとは、幕舎にかこまれた中央広場での人民裁判というのに参加させられる。

兵主大会といって、あちこちの収容所で、あま

り人気のなかった隊長達が、内部告発のような形で、つぎつぎに引っぱり出され、土下座させられ、筋金入りの共産党員に、罵声をあびせられ、つるしあげられる。党員が、大声でわめきたてている間中、大きな声で、インターの歌を歌わせられ、氣勢を上げさせられる。

兵隊達も、群集心理もあるが、変な態度をして彼らににらまれ、屁理屈でもつけられ、日本に帰れなくなつては大変と、みんな調子を合わせるので、人民裁判では、益々加熱していった。

この裁判で、シベリアへ逆送された人も相当いたらしい。人民裁判は毎日行われ、到着する隊は、必ず誰かが引っぱり出され、徹底的にやられる。

そして土下座して反省され、共産主義を賛美する言葉を言わされて、共産党入党を誓わされる。態度がおかしいと、いつまでもやらされ、周囲の兵隊に、その人間を突き上げさせる。その突き上げが中途半端だと、その兵隊まで引っぱり出され

る始末である。

苦しい二年間を生き抜いて、ここまで来たのだ。皆一緒に日本に帰らねばだめだ。共産党員に、にらまれないようにしなければいけない。人民裁判の時は、必ずインターの歌を歌わせられる。そこでとにかく、何もしていいときは必ずインターの歌を歌えというので、朝、目がさめると、暗いうちから大声で歌い出す。一か所で始まると、隣の幕舎も、その隣もと、モンゴル抑留者の幕舎は、インターの大合唱となる。全くあほらしい。しかし共産党の連中は、幕舎を回りながら誇らしそうな顔をする。

なんでもよい、ここに居る間は、彼らに気に入られるようにして、反感をかわないようにしなければ。なにしろ、日本の帰還船に乗るまでは、奴らに、絶対的な権限を握られているのだから。がまん、がまんであった。

舞鶴で四股を踏み

日本女性の美しさに目をみはる

積極的に我々の方から、インターの歌を歌い、彼らに絶対服従の姿勢を全員で示したので、幸い我々モンゴル抑留者の中から、人民裁判に引っぱり出された者はいなかった。しかしナホトカ港外に、日の丸の旗をかかげた大きな船が停泊しているのに、なかなか入港してこない。

インターを歌いながら、共産主義教育を徹底的にたたき込まれる毎日は、とても長く、つらかった。別の隊が乗船のため出発したという噂が流れる。自分達の隊には、なかなか連絡が入らない。このまま又逆戻りさせられるのではないかと、悲観的になったりもした。

十一月十六日昼過ぎ、乗船のための出発命令が伝えられる。大歓声を上げ、それぞれ荷物を、と言っても大した物もないが、あわててまとめ、幕舎前に整列し、点呼を終えて、埠頭に向かって進む。

両側には共産党員がずらりと並んで、じっと見つめている。何か言われやしないか、引っ張り出されやしないかと、皆じっと前を見つめ、緊張した顔で、黙々と、はやる心を押さえながら進む。やっとならば橋下まで到着。一人一人名前を呼ばれる。呼ばれた者から順次乗船する。

なかなか呼ばれない。まだかまだかと待つ間の長いこと。なんとも譬えようもない思いであった。

「長島秀夫」「ハイッ」

パッと飛び出したい気持ちを、グッと押さえる。ここで変なことになって、呼び戻されたら大変だ。落ち着け。名前を呼んでくれた人に一礼し、静かに、ゆっくりと、一步一步踏みしめながら、タラップを上る。

上には、日本人の船員が、笑顔で私を見つめている。

最後の一步の時、

「ご苦労様でした。さあ、ここは日本ですよ」

と言って、両腕を支えてくれる。

甲板に、どんと足を踏みしめる。

「もう大丈夫ですよ。安心しなさい。ほら、日の丸の旗が、勢い良くひるがえっているでしょう」

一瞬、抑留生活の苦しみ、なくなった戦友達のことなどが、走馬灯のように、頭の中を駆けめぐったと思った後は、ボーンとして、頭の中が真っ白になって、自分の力で立っていられないほどであった。

夕食に、味噌汁と白いご飯。これが胃のふにしてみても、なんと美味しく、懐かしい味であったことか。

船は、ナホトカ港を出て、港外に停泊し、翌日出発とのこと。船は、静かに岸壁を離れる。甲板に出て、港内を見渡す。なにか訳が分からず大声で「バカヤロー」と怒鳴ってしまった。

翌十七日、ナホトカを出発。なつかしの祖国日本へ。父や妹達のいる日本へ。ああ、地獄のモン

ゴルよ、ソ連よ、さらば。船は、全速力で走っているとのことだが、随分遅く感じられる。さらさらと雪が降ってきた。モンゴルでも、もう雪だろ

う。
翌朝、第二梯団乗船の先発承徳丸を午前二時に追いついたと伝わる。

快速白龍丸は、日本海の荒波を蹴立てて、一路日本へ日本へと向かっている。いよいよ明日の午後、舞鶴に入港とのこと。入港後の手続きなどの説明を聞いてから寝る。うれしさいっぱいで眠れない。

十一月十九日、舞鶴港入港。岸壁には、沢山の人達が手に手に日の丸の旗を振って、出迎えてくれる。海は青く、連なる山々は、紅葉に映え、裾野に広がる田畑の中に、点々と散在する茅葺き屋根の家々。十一月半ばながら暖かい日差し。少しでも早く日本の土を踏みたいと、甲板に出て待つ。

カッターに分乗して上陸。日本の土に帰国の第

一步をしるす。白い割烹着の婦人達の「ご苦労様でした」の声に、ただ笑顔で頭をさげるだけ。

美しく、やさしい日本の土を、再び踏むことができた。その日本の土を確かめるように、トントンを力をこめて二度、三度、四股を踏むように踏んだ。その様子を見ていた傍らの婦人が、口に手をあててクスッと笑う。何から何まで笑顔。

それにしても、日本の女の人の綺麗なことが、輝くような美しさ。真っ黒なソ連や、モンゴルの女の人しか見えない私達にとって、日本の女性があんなに美しいとは、改めて見直したほどであった。

消毒入浴を済ませ、廊下で頭からDDTの噴射をあびせられ、真白になってフウフウ言う。予防接種を受け、上から下まで新品の被服を支給され、やっと部屋に入る。広々とした畳の部屋で、夕食には、熱い味噌汁、真白なご飯、魚の煮付けなど、本当に食事をしたという気持で、腹いっぱい食べる。

帰還に伴う種々書類の作製等の手続きを終え、それぞれ帰郷することになる。

私の父や妹達は、三月の東京空襲で、全く居所が分からないので、とりあえず埼玉県大宮市に住む叔父（亡母の末弟）の家に行くことにする。

埼玉県本庄町の母の墓参を済ませてから、満州に行っていた妹夫婦が、無事帰国し、千葉県松戸市にいますというので松戸に行く。父達は、舞鶴の近くの福井県森田町に疎開していることが分かり、遠回りしたが、十一月二十八日、雪の森田町に着き、父と妹二人の元気な顔を見ることができた。

父は、「ご苦労さんだったね」と一言いっただけで、後は私の顔をじっと見ているだけであった。男手一つで中学三年生の時から育て、頼りにしていた、たった一人の息子を軍隊にとられ、終戦後は、

「お宅の息子さんは、八月武装解除されてから、行方不明で、生死のほど全くわかりませ

ん」

と言われて二年余。全く手掛かりさえなかった息子が、突如、目の前に現れたのである。父の心の内は、思い余るものがあった。

六年におよぶ軍隊生活。モンゴルの俘虜生活もやっと終わり、暖かい布団にくるまって、ぐっすりと眠った。